

Assault Lily MECHANICS

Prologue 01

「遭遇」

著： 蜜瀬かえで

——鎌倉府（旧神奈川県）の某所。

市街を一望する丘の上に一つの人影があった。

背後には山並みに向かう木々の群。

ようやくに開けた空を見上げ、

「——広い、ですね」

うーんっと、両手両足を伸ばし、全身で吹き抜ける風の流れ、大気の循環をその身で感じる。

「……2年振り、ですか」

とはいえ、見下ろす景色は自分が元々暮らしていた土地でもなく。

（そもそも、覚えてないですし）

ならこれが生まれて初めて感じる「広い」という感覚と言っても差し支えはないかもしれない。

森の中と違って遮るものがない。

市街に降りればまた違うのだろうけれど、いまここから見えるのはずっと遠くまで、自身の知覚にも届かないずっと向こうまでの吹き抜け空間。

「ほんとうに空の中に来たみたいですよ」

「見る」ことはあっても、全身をそこに置くのはまた違った感覚だった。

心までその広さに溶けて、どこまでも自由に広がっていく気がする。

すうっと息を吸い。

「さて」

つぶやいたのと同時に、遠く市街から何かが爆ぜる音が届く。

遅れて届いた風を真正面から受け、長い髪が背後にたなびいた。

風の中にはよく知る臭いが混じっている。

森の中でさんざん相手にしてきたモノたちの臭い。

「……台無しです」

それに年相応に頬を膨らませた。

せっかく森を抜けたというのに、その先でも出くわすはめになるなんて。

（先生の言ってたとおり。もうほんとどこにでもいるんですね……）

ソレがまるで羽虫かなにかでもあるかのように、嘆息。（ともあれ、せっかく街まで来たのに、それを台無しにされるわけにもいきません）

なので、よし。と、胸の前で両のこぶしをぎゅつとにぎって。

一歩踏みだし。

駆けて。

飛び込んでいく。

真っ青に晴れた空の中に。

真っ白な少女の影が舞った。

——同日。

——鎌倉府市街。

(……完全に、分断されてしまいました)

飛び出してきたスモール級を何とか打ち落とせたものの、焦りを覚えた照準は普段よりもおぼつかない。

鼓動を沈めようと、二川二水は冷静に現状を整理しだす。飛来した小型ヒュージの群れを討伐するべく、二水たち

——一柳隊はこの市街地まで出動していた。

ミドル級も数体確認されていたが、群れのほとんどがスモール級。

ただし二水たちが到着するまでの間に、群れは二群に分かれて侵攻を開始しており、防衛隊が周囲を固めてくれているものの、こちらも隊を二つにわけるか否か。

一柳隊は結成したての隊だが、個々の技能では秀でたメンバーが揃っている。しかし逆を言えば隊としての実戦経験は浅い。分隊を選んだ場合、片方に万が一が起きることもあり得る。そのときにもう一隊が即座に援護に回れるかどうか。

慎重に考え、普段通り、訓練通り。

一番慣れたフォーメーションを崩さないことが得策。

ここはもう、戦場なのだから。

由結の指摘を受け、隊を分けることなく先にミドル級を中心とした一群を討伐。その後、残りの群れの討伐に向かう作戦に決まった。

——防衛隊の人たちには申し訳ないけれど。

こちらがミドル級を倒すまでの間、銃火機で対抗可能なスモール級は防衛隊が押し留める。

時間はかかるが隊の安全を考えた上での決断だった。

誤算があったといえは、

(……ヒュージの侵攻がまったく止まらなかったことです)

接敵したものの、ヒュージの群れはこちらに敵対することなく進軍を続行。結果、敵の殿を追う形での戦闘となり、群れの前を取れずにいた。

梅のレアスキル「縮地」ならば追い越すことは可能だったが、一人が前に出て止められる数でもない。

自然と前衛のAZが前に伸び、それに追隨する形でTZが引つ張られた。

BZの梨璃と二水もそれを追って前に出ようとしたところで、

「JHUUUUUUU！」

「二水ちゃん！」

速度を速めた梨璃と一歩出遅れた二水の間にスモール級ヒュージが飛び込んできた。

追っていた群れから、突如方向を変え、こちらに向かう一団が出たのだ。

ヒュージたちの行軍の突然の変化。

由結たちAZの瞬時の対応で数は減ったものの、伸びていた隊列の中にヒュージたちが分け入ってくる。

「梨璃さん！」

「楓ちゃん！ 二水ちゃんがっ」

TZを中心に即座に集結するも、二水ひとりを残し、隊

は前後から囲まれる形となった。

(……とつても、マズい状況です)

現在、ヒュージたちの狙いは梨璃たち、囲みの中心を向いている。梨璃たちが注意を上手く引きつけてくれているのだ。だが、時折はぐれた数体が二水の方にも向かってくる。

それを何とか打ち落としている現状だが。

構えた愛機、グングニルを無意識に抱えるように持つてしまっていたことに気が付き、再度シューティングモードで、いつ敵がこちらを向いても打ち落とす構えを取る。

懸念はもう一つあった。

最初に分かれたもう一群がこちらに向かって動き出したことだ。

このままでは包囲された梨璃たちの横手から新手の一群が雪崩込んでくることになる。

いざとなれば、由結のルナティックランサー、ミリアムのフェイズトランセンデンスで強行撃破も考えられるが。

(まずは、私がここで耐えられるかどうか、です……！) 正直なところ、どっちかと訊かれたらすぐに「無理です！」って答えたい。

でも。

（ここは、もう、戦場、なんですよ）

訓練も怠っていないし（全然まだまだで、体力不足も否めませんが……）、まだ数回だけの実戦経験も、ある。

仲間と、自分のことも、信じる。

（私だって、リリースです）

鼓動の脈動と緊張でふるえる指をトリガーにかけた。

大丈夫。周りちゃんと「見えて」います。

二水のレアスキル「鷹の目」は、上空からの俯瞰視野で周囲の状況を把握できる能力だ。

鶴紗のファンタズムのように、先が「見える」わけではないが。

落ち着いて。敵の位置、味方の位置を捉えていれば、大丈夫。十分対応可能です。

ダン、ダン、ダン！

三発で何とか命中させ、一体を撃墜する。

ダン！

「っ」

ダン、ダン！

はぐれるように飛び出して来た一体ずつを、順番に撃ち落としていく。

しかし、

「三体同時っ！？」

ダン、ダン、ダン、ダン！

——否。

「四体！」

上下に二体被さっていたのが、一体に「見えていた」。

（レアスキルに頼りすぎでしたっ！）

打ち落としかれなかった一体が眼前にまで迫る。

即座にダインスレイフを近接用のブレードモードに切り替えようとするが、

「間に合わつ……」

スモール級の熱線程度なら、CHARMのオートガードで防ぐことが可能だ。

そこから体制を立て直して……。

……でも。

みんなから離されて一人で。

指はふるえるほど緊張してて。

目の前にまで迫った異形。

熱線ではない。鋭いキバでの直接攻撃。

「JH U！」

異形の鳴き声に。

恐怖が……。

——大丈夫。

瞬間。

世界が、止まって見えた。

眼前には、描かれた弧月。

それがヒュージを

両断していた。

(……アステリオン?)

CHARMメーカー、ヒヒロカネインターナショナル製の第2世代機。汎用性の高さから使用しているリリイも多く、一柳隊では雨嘉が使っている武装である、が……。

その振り手。

側面のガラス窓を蹴破って飛び出し、その勢いのまま、空中で一回転するようにブレードを一閃した人物に、見覚えは、ない。

正午の風に軽く揺れる長い髪。

自身の背丈ほどもある長大な刃を払い。

振り返った表情は、まなじりの下がった穏やかなもので。

それが二川二水と、少女——もう一人の千代御代との初遭遇でした。

「お姉さん、怪我はないですよね？」

「……へ？ あ、はい」

最初とつさに反応できなかった。

なにせ童顔な上に身長も低めな二水に対して、大人びた顔立ちにすらりとした背丈。

そんな彼女からいきなり「お姉さん」と呼ばれたのだ。戸惑いもする。

そしてそのときになって、ようやく自分が地面にへたりこんでしまっていたことに気が付いた。

そんな二水を庇いつつ、少女はCHARMのブレード側面を盾のように構え、敵が来ればそのまま袈裟掛けに切り上げることも可能な抜刀の構えを取っているが、口調も表

情も穏やかなままで。

それに対して二水は、

(ぜんぜん、未熟です……)

小型ヒュージ相手ですら緊張したり、怖がっていたり。手もふるえて標準も合わずに、あまつさえ腰を抜かしてしまふなんて……。

普段自分がどれだけ隊のみんなに助けられて……ううん。甘えてしまっているのか。

(味方がいてくれるというだけで、安心、しきってましたね、私……)

みんな……。

っ！

「みんなっ！」

「はい。見えてます。でも」

少女が視線を向ける先は正面ではなく、彼女が飛び出してきたのは反対側。ヒュージの別動隊が向かってきている方向だ。

「！」

二水にも「見えた」。敵の群れはもうすぐ側まで来ている。慌てて立ち上がろうとして、

「っ」

……立ち上がれなかった。外傷があるわけじゃなくて。もつと情けない理由。

目頭が自然と熱くなる。

こんなことで泣いちゃダメなことくらいわかってはいる。わかつてはいるけど……。

——ぼん。

その頭にあたたかい感触が触れた。

そして、

「よくがんばりました」

「……え？」

「遠くからでもちゃんと全部見えてましたよ？ お姉さん、がんばってるの」

そう言っ。

「怖いときなんて、誰にでもあります」

それに逃げないで向き合うのってすごく勇気がいるんです。

すごくしんどいです。

だからすごくがんばらないとだめなんです。

だから誇りこそすれ、落ち込む必要なんてありません。全部、わたしの先生の受け売りですけど。

こうして、がんばったら頭撫でてくれるのも。

二水の頭を撫でながら、少女が微笑む。
だから、と。

「次はわたしが、がんばりますね」

と、二水の額に押しつけてきたのは、

「……手紙？」

蠟で封された古式の封筒。

受け取った途端、

「え？」

周囲に半径1mくらいのマギの障壁が展開された。

「マギの結界？」

結界は二水、というより受け取った封筒を中心に発動しているようにみえる。

「この中にいれば大体安全ですから」

それと。

少女が目を向けたのは二水が抱きしめるように抱えていたグングニル。

「借りていいですか？」

「……私の、ですか？」

「手数がほしいんです」

「それって……」

返事も待たず、少女は流れるような自然な動作で二水からグングニルを受け取ってしまう。

片手には、自身のCHARM、アステリオンを握ったままだ。

「あ、あなた、もしかして！」

通常、一度に使用できるCHARMは一機のみ。これはCHARMが使用者のマギや精神に感応し動作する武装であるため、それによってリリイたちはCHARMを自らの身体の一部のように振るうことができる。

だがもちろん、例外も存在する。

例えば現行最新鋭の第三世代CHARMの中には第二世代が有する変形機構を更に発展させ、合体分離機構を有するものもあり、それによって二丁拳銃や二刀流が実現されている。

そしてもう一つは、

「——円環の御手」

リリイに発現するレアスキルの中でも最近になって確認されたそれは、一度に二機のCHARMの同時起動を可能にする戦場の華形スキル。

それをこの少女は……。

「じゃあ、行ってきますね」

言いつつ、振り向きざまに向けたグングニルが、群れからあぶれた一体を正確に打ち抜く。

「お姉さんに負けないくらい、がんばってきます」

現在の戦場は十字に交わる交差点。

横切る道路を挟んで向こう側に梨璃たち、一柳隊の面々が最初に追っていたヒュージの群れと現在も接敵している。

そしてもう一つの群れ、ミドル級は有さないものの、数でいうなら前者と同等の群れが左手から押し寄せてきている。

その交差点に向かって少女は駆けた。

最初の一步は踏み込み。

その足で蹴った地面から一気に加速する。

綺麗に伸びやかに、直線のラインが流れるように交差点の中央へと到達したとき、右足が地にブレーキをかける。踏みしめ、加速の前傾姿勢から身を後方へと引くことで

両手のCHARMが慣性で前へと伸びる。

右に構えたアステリオンがシューティングモードで前方の群れの一部を抜けば、反動で身体は左のグングニルに引き寄せられるように右の足を軸に回転。セミオートマシンガンが弧を描くように側面からの敵を散らし、そのまま身を任せ一回転の間に左足を二水から見て右、側面から来る敵の反対へと下げ、アステリオンが再度正面を向いた瞬間で、先行して迫ってきた一体を横薙に切り捨てた。

完全に側面へと向く身体。回転の残滓を受け、背後ではグングニルがブレードモードへと展開する。

展開の反動はそのまま後ろに下げた足の踏み込みとなつて。

爆ぜる。

それは前に出るための低空での跳躍。

踏み込みにひねりがあったためか、身体はまた回転し。

敵の群れの中心めがけて切り込んでいった。

それはわずか数秒での出来事。
まるで風に戯れる精霊のように。
長い髪にプリーツの裾を翻し。
少女が一人、戦場を駆け、舞い踊る。

ぽかん。となっていたのもわずかな時間。
リリオオタクの性が二水を現実に引き戻した。
(なんですか！ なんですか！ なんですか！ アレ
っ！)

スモール級相手とはいえ、数が数だ。
なのに、ためらいがない。

しかし行き当たりばったりというふうでもない。

(ファンタズム？ いいえ、サブスキルで虹の軌跡でしょ
うか？)

一手、いや明らかにそれ以上先までを読んで計算された
ような動きはまるで、

(踊ってるみたいですよ！)

戦場で不謹慎ながらもそう思ってしまうほどに、少女の
動作には淀みがない。
可憐に戦場に舞うリリオ。
まさにそれを体現するかのような――。

R R R R ……

R R R R ……

「わっ！ あ、とっ、と！」

突如鳴り響いたのは、場違いなほど間の抜けたコール音
だった。

音の発信源は、あの少女から預けられた一通の手紙。

それがまるで、映画で観た、旧式の電話器のベルよろし
くリンリンと鳴り出したのだ。

「っ、通信ですか？」

(え、えーと……)

宛名は白紙。わかりやすくあるとすれば、

「この、封のところの……」

蠟印に軽くこすれる程度に指が触れた瞬間、

P！

何かボタンを押したときの音がした。

(つ、つながったんでしょか?)

勝手に他人の通信に出てしまってもよかったのだろうかと、少しドキドキしつつ、

「……も、もしもし?」

「あら、かわいい耳」

「ひやつ」

通信端末と同じく耳に当ててみたところ、便せんから女性性の音が響いた。

びつくりして思わず腕いっぱい遠ざけると、くすくすと鈴を転がすような笑い声。

「……ごめんなさい。……あんまりにね。……反応がかわいくって」

笑いを噛みしめるような声音に、

(怖い感じではさそうですが)

「……あ、あの」

「あ。耳に当てなくてもいいの。その結界の内と外の両方から全部拾ってるから」

知らない声。

なのに、

「二川二水さん」

「はいっ」

突然、名前を呼ばれて、背筋と一緒に腕も伸びた。

まるで賞状のように前に掲げられたた封筒に、おずおずと、

「……どうして、私の名前?」

「そんなの防衛省発行の官報を?」

「毎日、チェックしていれば?」

「まあ、私の場合? いまデータベースであなたの波長をね、ばばっと検索したただけなんだけど」

と、またくすくすと笑う。

(なんだかとても……マイペースな感じですよ)

頭で言葉を選びつつ、身構えていた肩の力も抜けてしまうような……。

「で、二水ちゃんの緊張も解けたところで、本題に入りたんだけど」

「……本題、ですか?」

「そう、本題。実はこの手紙ね、お宅の」

あ、おたくって二水ちゃんみたいなオタクじゃなくて、百合ヶ丘って意味ね?

……。

「で、お宅のね、とりあえず大人なるべく偉い人に渡す

ようにって伝えてあったんだけど」

一回調べただけで、生徒会長が政治的判断とか、いろいろ興味なくて、よくわかんなかったから。

とりあえずそれでいいかなーって。

軽い口調で飛び出してきた「政治的」という言葉にイヤな予感を感じつつ、二水はおおずと提案してみる。

「あの、でしたら帰還したときに教導官にこれを……」

「あ、ごめんなさい。それもう無理なの」

「……無理？」

「この通信ね。この一回こっきり使い捨てのプランなの」

「……へ？」

「うん」

「……ええー……っ!？」

と、いうことはつまり。

この人の言う通りなら、自分は、なにかしら政治的(?)

な案件の入った手紙を勝手に開けてしかもその通信を使い切っちゃったとかそういうレベルのすごくマズいお話ですよっ!？」

通信の向こうからは、「やっぱり、結界と通信は別々にした方がよかったかしらー?」とか間延びした声が聞こえてくるが。

「ど、どうしたらいいんでしょうっ!？」

慌てて訊ねると、

「まあ、過ぎたことはしょうがない」

ひどくあつけらかんとした声が聞こえてきた。

「で、二水ちゃん。ちよつとおねがいなんだけど」

「はいっ! なんてしよう!」

こうなったら、この相手の(よく考えたらまだお名前も
うかがってません!)の言う通りにする他ないですっ!

「うんうん。いいお返事。じゃあ、いま持つてる通信端末、

ある? あ、じゃあそれであの子の今の様子、撮れる?」

あの子って、あの子ですよね?

この手紙を二水に渡してきた少女。

「はい。できます!」

「良いお返事。じゃあ、撮影スタート」

二水は片手に封筒を持ったまま、もう片方で持った端末操作しつつ、カメラを録画モードにして、今もヒュージの群れのなかで両刀を振るう少女に向けた。

「でね。この結界、流石わたしって感じで」

中の様子とか、声とかそういうのは全部ミュートできちゃう仕様なの。

つまり、

ちゃんにはお願いしたいことが残ってる」

そう言われてしまったては、通話に出てしまった二水としては、なにも返せない。

なので、

「……お願いってなんですか？」

「あの子の戦いが終わるまで、私のお話におつきあいしてほしいの」

それでね、

「それを報告書にして、偉い人、教導官？ に渡してもらえないかしら？」

今撮ってもらってるあの子の戦闘、映像だけだと伝わりきらないとことかいっぱいあってね。

それでね、と改めて前置いてから。

「そこらへんを使って、あの子を百合ヶ丘へ入学させてあげてほしいの」

百合ヶ丘への入学。

世界的にも名門とされるガーデン、百合ヶ丘女学園への入学方法は2つのタイプに分けられる。

一つは通常の学校と同様、試験を受けての入学。二水も今年の春この方法で百合ヶ丘に入学した。

(補欠合格でしたけど……)

リリイとしての資質を測るスクラー数値において、CH ARM起動の最低条件である50以上であればガーデンへの受験資格は得られ、二水自身も高等部入学まで何度か(というか全部の)選抜試験に参加している。

そしてもう一つが、スカウトや引き抜きによる特別選抜だ。

他のガーデンで活躍しているリリイや将来が有望視されている次期獲得候補リスト。学内のリリイからの推薦が基本であるものの、スカウトや教導官が加えることもある。入学したて(しかも補欠合格)の二水が推薦なんて、とんでもない！ なので、この人の言う通り、目の前の少女の戦いを記録し教導官に報告するのが「お願い」に対する対応としては妥当だろう。

ただ、

(「円環の御手」の持ち主というだけで、条件としては十分な気がしますか？)

というより、そんなレアスキルを持ち主をこれまで二水がチェックし逃していたなんてことないのだが。

（最近覚醒したばかりか、もしくは何らかの事情でこれまでにガーデンに所属していなかったんでしょうか？）

とはいえ、先ほど二水を救ったときの一閃といい、今も目の前で繰り広げられている戦いはとても素人のものではない。

ヒュージとの戦闘経験も十分にあると判断できる。

これなら、この「お願い」を叶えることもたやすいことだろう。

けれど、

「……え？ あの子のレアスキル、「円環の御手」なんかじゃないわよ？」

相手の一言で、前提がいきなりひっくり返った。

「え、でもでもですね！ 今だって両手でCHARAMを」

それに、ふーむ。という相づちがあつて、

「では、ここで問題です」

突然の出題、それは、

「あの子の持つてるレアスキルはなんででしょう？」

「円環の御手」、じゃないんですか？」

アステリオンと、二水のグングニルを両手に戦う少女に

カメラを向けつつ再度疑問符まじりに応えたものの、

（あえて訊いてくると言うことは……たぶんそうじゃない、ということ、ですよね？）

ただ、レアスキル「円環の御手」を除いて、第二世代CHARAMを同時に起動できる方法などない、はず。

（「円環の御手」のサブスキルという可能性もありますが……）

二水の知る限りにおいて、その発動者はいまだ「なし」とされている。

悩む二水に、通信の向こう側から苦笑が漏れた。

そして、少したしなめるような口調で、

「大きいところにはばかり目がいつて、小を取りこぼすのは、

「観測者」としてまだまだだよ？」

——「観測者」。それは二水の持つレアスキル「鷹の目」

を指しての言葉だろう。

俯瞰視野という異常空間把握能力で情報を整理し、板上の駒のように戦場を捉える。「鷹の目」は確かに、戦場の「観測者」と言えなくもない。

二水は撮影中の端末の映像を拡大しながら、小型ヒュージの群れの中で武器を振るう少女の手の動き、足裁き、攻撃の精度、命中時の威力。それら一つずつを追っていく。

おそらく、あえて「観測者」と二水を呼んだということは、目に見えるところに特徴があるということです。

目に見える。

……目。

「！」

そこで初めて気づいた。

（攻撃の時、視線が相手を向いていません！）

さらに言えば、その視線は常にあらぬ方向を見渡すように動いていて。

まるで、それこそ空から地上を見下ろしているようなその動きにはありすぎるほどに覚えがあります！

短かったけれど、彼女、先ほどの会話の中でも「見えた」

「見えていた」という言葉を使っていました！

「私と同じ、「鷹の目」です！」

「正解」

ただ、繰り返すが「鷹の目」は空間把握のスキルだ。高レベルになると敵の弱点まで把握可能にもなるが、あくまで知覚系。自身の身体能力や保有するマジ総量を高めたりできるものではない。

（ということは、他にも発動しているサブスキルがあつて、それとの複合の可能性ですが……）

サブディビジョンスキル、略してサブスキルと呼ばれる能力はレアスキルが原則一人に一つだけ発現するのに対し、能力としての質は落ちるが、複数の覚醒が可能である。確認されている中では初代アールヴヘイムの長谷部冬佳様の7つが最大とされており、それら複合で、レアスキルだけでは出来ないような特殊な能力の行使も可能であるが。

「あの子、「鷹の目」だけよ」

思考を先回りされたように声が届く。

「ただちよつと、異常な覚醒の仕方をしてるけど、あなたと同じ「鷹の目」」

スキル数値も、マジ保有量もあなたとほぼ同じくらいか少し高いくらいね。

「だったら、どうやって？」

単に二つのCHARAMを振り回すだけならそれこそ体力的に身体能力を鍛えれば可能であるが、少女は両の手から弾丸を撃ちだしている。ブレードモードならまだしも、シューティングモードの行使はCHARAMが起動していないと不可能だ。

「そうねー。じゃあ、視点を変えて今度はCHARM、マジクリスタルコアに注目してみましようか」

(……なんだか、授業を受けている感じになってきましたか)

言われたとおり、二水は少女が持つマジクリスタルコアを拡大表示させ、すぐに気づいた。

「CHARMを交互に起動してるんですかっ！」

画面に映るマジクリスタルコアは、二つが交互に明滅している。通常なら、マジが注ぎ込まれ、起動した時点でその光を放ち続けるはず。しかし少女の両の手では、二つが呼応するように明滅を繰り返しているのだ。

(CHARMの同時起動ではなく、交互起動。それなら「円環の御手」でなくても両手で二つのCHARMを使うことができます)

ただし、理論上は、である。

CHARMの起動には早くても数秒が必要。

しかし少女の放つ明滅の周期はもっと早い。

「二水ちゃん、CHARMが取り得る「状態」っていくつかあるか言える？」

訊かれ、二水は指折り数えた。

「まず完全に停止しているいわゆるOFFの状態です。反対に起動中、ONの状態。ON状態でも安全装置をかけただけで自身との接続は切らない停止状態。対してOSをス

リープ状態にしたまま自身と切り離す休止状態。全部で4種類です」

他にもオーバーヒートなどもあるが、あれは正常な「状態」に分類するか否かは物議をかもしそうなので、今の回答には挙げない。

ゆえに導きだされる答えとしては、最後の休止状態の繰り返し。ただしスリープとはいえ、復帰にはやはり秒単位の時間が必要だ。

という二水の答えに、

「50点」

「え？」

「実際にはOFFからONに移行するまで間。反対にONからOFFに移行する間。いわゆる移行状態も存在してるわ」

確かに言われてみれば「ある「状態」から別の「状態」に移行する間」もCHARMが取り得る「状態」の一種だ。

じゃあ、次の質問。

「CHARMがONからOFFに切り替わる時ってどういうとき？」

それは単純にOSのシャットダウン操作を行なったとき。

（あとは……使用者のマジが枯渇してCHARMの起動が維持できなくなった場合です）

後者の場合だと、CHARMに供給されるマジが徐々に減少していき、ある時点でOS保護のための自動シャットダウンシーケンスが開始される。

「それは、ほんとに「徐々に」マジが供給不足になった場合ね」

じゃあ、強制的にマジの供給を絶った場合のCHARMの振る舞いはどうなるでしょう？

「CHARMはマジを原動力に動いてますから、供給が絶たれたらその瞬間に強制停止のシーケンスが……」

「走らないのよ。実は」

まあ、やらないんだけどね。普通。

マジクリスタルコアの故障につながるから。

と、前置いて、

「でもね、OSとか、複雑なシステムのお話を持ち出すから話が面倒になるだけだね。マジクリスタルコアって、私に言わせたらあれ、単なるトランジスタ増幅回路と同じ原理なのよ」

あ。あくまで単純化した私の理解の話ね？

「増幅回路ってね。電源が入ったら、トランジスタのゲー

トが開いて「増幅」が起きるっていう単純な装置なんだけど。CHARMで言ったらこの「増幅」が起きてるときが起動状態。

ただ、このゲートの開放には一定量の電源、CHARMでいうとこのマジね。これが必要で、それ用にゲート手前には蓄電用のコンデンサがついてるわけ。そこに一定量のマジがチャージされたところでゲートが開く。

で、ここがミソなんだけど、このコンデンサに蓄積されたマジがさっき言った強制停止シーケンスにも使用されるの」

（……え、えーと）

二水も自ジャンルの話題になると止まらなくなるが、この人も、

（相当ですね……）

リイだけでなく、CHARMオタクの二水だが、CHARMの調整を担う工学科生ではないため、その中身にまで精通しているわけではない。

（たぶん、ミリアムちゃんだったら、ついていけるんじゃないけど……）

それを察したのか、

「まあ、簡単に言っちゃうとね。両手に持ったCHARM

にマギの供給と精神リンクを交互にスイッチングしていけば、CHARM内部に起動用のマギが一度にじやなくても、少しずつ溜まっていつて。そのうちに両方を稼働状態に持っていけるし、蓄積した分は、瞬間でなくて徐々に減っていくから、スイッチングのスピードが強制終了シーケンス開始よりも早く行えるとしたら？」

「……2つのCHARMを交互という制約はありますが、ほとんど同時に運用できて、しまえ……ます？」

「そういうこと」

両手のCHARMの起動を完了したのは、交差点に突入するまでの直線の間だ。

その前に一度、左でグングニルを撃ったことでこの子の波形特性はつかんでいた。

あとは靴底に仕込んである術式を使って踏み込んで加速、2つのCHARMの波長に揃えた等速の足運びにのせて左右へのマギ供給のスイッチングを完了させる。

（波長が合わせやすい人でよかったです）

人が保有するマギの総量に個人差があるように、保有するマギの波形にも個人差がある。それらにあわせてCHARMのコア部分はカスタマイズされてるのだが、

（波形が大きく違うと、マギを入れるタイミングとかスイッチングのときの減り方を考慮したリズムを組み立てる必要があります）

それがいらないうことは、攻撃のタイミングが単調になるという反面、単純な足裁きのステップだけで体内のマギの巡りをコントロールできるので、要するに考えることが減って楽なんです。

ヒュージの群れに切り込み、自陣となる範囲を定めたら、（ワルツがちょうどいいですね）

そう判断し、

ワン、ツ、スリー、ワン、ツ、スリー

たなびくスカートが三拍子のリズムを刻み出す。

ダン、ダン、ダン、

と、変、形、（クイツ、カツ、コン）

斬、変形（スパツ）、斬、

斬、斬、でここは空起動、

からの、回避で、斬。

ワルツといっても、実際に踊るわけではないし、あんなスローなリズムで動くわけでもない。あくまで動作の基本となるテンポの例え。三拍子ワンセットの連鎖だ。

自分の場合、アステリオンのアクスはほとんど使わないので変形には、毎回クイツ、カッ、コンだけれど。グングニルはスパッと広げて、折りたたみはクイツ、カコンですむのがいい。

(片手だと、結構コツ要りますけど)

敵の配置は「見えて」いる。

熱線での攻撃が来るタイミングも相手の「内側」のマギの動きを「見て」いれば把握できるし、物理でこられてもリズム中のステップで回避可能な位置を選んで動いている。

注意すべき点は、自身のマギ保有量が少ないので、必ず一撃でしとめる丁度の威力に一撃一撃を絞ることと、時間短縮のための数体同時の撃破。CHARMを交互に起動している以上、攻撃を受け止めないのはもちろん。

一番大切なのは、止まらないことだ。

ブレードで振り回せば綺麗な回転補正でリズムキ

プも上乗せだし、なにより遠心力が安定する。

運搬を考え、ある程度軽量には作られているとはいえ、CHARMに重量がないわけではない。むしろその形状にあった重さが存在しているのを、体内のマギとの感応によって手足のように振るえるのだ。

つまり、両手のCHARMを交互に起動させているいまの状態だと、

(片側は常に遠心力と慣性で振り回してるにすぎませんからね)

そのための等速運動。

下手に加速したり減速すると、重量が腕にくる。

ただそのひっぱりをうまく使って次につながる動作も組み込んでみてもいい。

あと、起動していなくても遠心力で振り回すだけで牽制にもなるし、ダメージはなくても、あたりをつけてぶつければ、そこを力点に背後に回って逆のブレードで切り上げる。

そのままの垂直跳びで上空も斬り回り、重力落下にCHARMの重さをのせ、右で弧月にブレードを振るう。

着地の直後、ダン、ダン、とちょうど直線に並んで「見えていた」2体ずつをそれぞれ一弾で貫く。

(いい感じです)

両手のCHARMの明滅も綺麗にそろっている。体内を巡るマギの動きも振り子のように綺麗に動いている。

借りるとき、頭で考えていないといけない量と、手数とを並べて、手数の方を選んだけれど。

ほとんど考えずに動かしているということは、やっぱり、

(あのお姉さんとわたし、相性ばっちりですね)

広げた両のブレードが上下に波打つ円を描き、押し寄せるスモール級を斬り裂いた。

(小さくて、かわいいお姉さんでした)

わたしでも、守ってあげたくなるような。

でも、ちがうんですよね。

彼女はリリィ。守る側の人間。

それに対して自分は。

ただの半端ものです。

(……お姉さん、がんばってました)

怖いの、必死で堪えて。

遠くからでもわかりました。

わたしだって、これでもいま実は結構怖いですよ？

実力と恐怖って、たぶん天秤に掛けるものじゃありませんけど。

そういう思考が出るくらいには、一応戦い慣れはしている。

けど。

戦いなんて、慣れるものじゃありません。

慣れちゃ、いけないんです。

いつだって、怖さはすぐ隣にすることを忘れちゃいけないんです。

お姉さんもそれと戦ってました。

だから私も。

不思議な高揚感があつた。

初めて降りてきた街。

知ってはいるけど記憶にない、人々の営みの場所。

そこで出会った見知った相手が、戦いの中に感じる恐怖だなんて。

皮肉にもほどがある。

でも。

守るんです。

守るために戦うんです。

わたしが先生から教えてもらったのはそれだけなので。

預かった左のグングニルが唸る。

——はい。

負けません。

「見てて」ください。

わたしも、守るのは結構得意なんです。

最初は群れだった。

それを波打つようなブレードの円弧が斬り減らし、離れ

るものは熱弾が穿つ。

量は既に数えられる個にまで減っている。

残り、5体。

「群が環の動作で体に落ちていく」

ただの言葉遊びで関係はないけれど、おもしろいわね。

そう言いつつも、通信の向こうの声は、面白がっているふうではなく、

(観察、してますね)

二水がカメラを構えているのと同じく、きっとこの通信の向こう側も。

それでいてなにかに納得しているようにも思える口調だった。

「二水ちゃん、アイツら元は何だったと思う？」

ヒュージは、ヒュージ化細胞の暴走によって巨大化した源生物たちだ。

つまり、何か元になった生き物がいる。

ただ、捕食や寄生、成長の繰り返しで原型を留めていない個体も多いが。

「蟻じゃないでしょうか」

ミドル級を先頭に付き従うように、統率され地を這うスモール級の群れ。羽を持って宙を往く個体。

熱線での攻撃よりもカギズメやキバでの接近戦を主体とした集団は、餌を求めて行軍する軍隊蟻を連想させた。

残り、4体。

「そーよね。あれ、たぶん蟻で正解」

似たような個体は森に結構いたしね。

「話、戻るんだけど」

「え？ あ、はい」

「あなたも持つてる「鷹の目」って、どういうレアスキルか説明できる？」

それは、もちろんです。

「上空から地上を見下ろすように戦場の状態を把握できる、異常空間把握です。使つてるときは、空中に視点があるみたいになりますけど、実際には把握した空間を脳で処理して戦術マップを作っている感じなので、実は外に向けて目を動かす必要もないんですけど。マップとして「見えて」しまっているの、見渡すときなんかは結構変な方向にいたりします」

（目がぐるぐるんしてるので、使つているところを初めて見る人には、若干気持ち悪がられますね……）

その答えに対して、通信の声のトーンが変わるのを二水は感じた。

残り、3体。

「これは私の持論なんだけど」

そう前置き、

「この世界に重なるように存在している「マジ次元」の中で「鷹の目」に相当する次元に詰まっている情報体としてのマジは、ファンタズムとか他の「マジ次元」と比べて、保持している情報が単純な分、ものすごく過密で、かつマジ同士での情報の伝達効率がすごく高いと私は考えているの。

その中でレアスキルに限らず、こっちでもそうだけど、伝播の範囲っていうのは、遮蔽物がない限り、原点を基準に減衰を仮定すれば、おのずと球状になる。

まあ、使い手によつてそれを四角く切り出したりして自分にとって処理しやすいようにしてるとは思うんだけど。元のこの球状ということを考えれば、「鷹の目」がなぜ、空中からの視点になるかは当然。

そこが一番、「原点から遠い観測点」であるからと説明できる。

けれど、それを言ったら、球面上の全体がそれに当たることになる。

でもあくまで「鷹の目」は上空を選択する。

その理由として一番単純な説明は、空からの視点には遮蔽物が少ないから。

でも待って。「マジ次元」に詰まっているのはあくまで「情報体としてのマジ」。そこで遮蔽物なんて関係ない。

でも実際に「鷹の目」保持者が「見えている」ものは「上空から捉えた地上の状態」だという。

ならば、こう考える。

「鷹の目」の「マジ次元」は通常の人間の脳で処理しきるのには余りに情報が過密すぎるのではないのか？

実際、相手の弱点なんかも「見られる」子がいるくらいだし。

だから、脳をパンクさせないためにこっちの世界にある遮蔽物で線を引いて、情報のサンプリングを行なっているのではないか？」

残り、2体。

もはや、二水の理解など置いて立石に水といった速度で語られる内容に。

（「マジ次元」？ 情報体としてのマジ？）
???

??????

「？」がいくつ合っても足りない。
それでも。

妙な用語さえおいておけば、ついていけないこともなくもない……かもしれない。

（……どっちでしょう？）

二水自身もわかったようなわからないような。
でも相手の伝えたいことはなんとなくわかる。
要は「鷹の目」の原理だ。

「では、もし、その線引きによるサンプリングが必要なくて、自身を原点とした球体全体につまったマジの、そのどこからでも情報を読みとって処理できる脳を持っていたら？」

残り、1体。

（そんなところまで「見えた」ら……遠く、それに上空と同じくらい、あと、球状ならそれこそ地中まで……って、あああああっ！）

少女がそれを、残った最後のスモール級を、アステリオ
ンで切り捨てた瞬間――。

「相手は、蟻よ」

地面が、爆ぜた。

来るのはだいぶ前から「見えて」いた。

直前まで相手にしていたのとは、結構大きさが違う。

なので最初から一撃で斬り伏せるのは無理と判断し、小
さいのは全部やつつけた後の、ほんとの最後の一体として
残っていたのだ。

タイミングもばっちり。

マギ残量もちょうど。

だから、おもいつきり。

地中から躍り出てきたラージ級に自身のアステリオ
ンを突きつけ。

体内に残しておいた残りマギを全部、マギクリスタルコ
アのゲートめがけ、それを壊す勢いで、流し込んだ。
結果的に向こうから流れてきていたマギはすぐさま回
路に満ち、溢れ、奔流となって。
雪崩出る。

二水が見たのは、最後の一体のスモール級を切り捨てた
少女が、そのまま地面にブレードを突きつけたのと同じ時、
震動と共に突如地中から現れたラージ級。

それがそのまま莫大なマギが作り出す巨大な円柱に飲
み込まれていく。

砲芯を軸に吹き出したアステリオンの暴発に。

そしてほぼ同時に梨璃たちのほうからも、全範囲に向け
て放射されるマギの光。

ミリウムがフェイズトランセンデンスを使用したのだ。

というわけでね。

二水ちゃん。

少し手のかかる子だけど。

育てた私が言うのもなんだけど。

いい子だから。

あの子の願い、叶えてあげて。

「以上。G E H E N A 「最高級」魔術顧問、千代御代、でした♪」

そう言い残し、彼女——千代御代は通信を切断した。

結局、

（想定範囲内、とはいかなかったわね）

まあ、おいおいそういうものだし、ことさらに珍しいこ

とではない。

特に、あの子に関しては。

拾ったときから全部台無しにしてくれちゃったのよね

え。

一年と少し前だけど。もう結構前のことに感じる。

……。ぼん。

手を打つ。

つまり、私、まだ、若い！

あれ？ 逆だっけ？

首をひねりつつ闊歩するのは、二年ぶりに出勤した御代専用のラボだ。

「顧問」という部外者的な肩書きでありながら、G E H E N A 本体から専用の研究環境が与えられているのは、それだけ彼女をつなぎ止めておきたいだけの見返りがあるということ。

それを今から実践しに行く。

（楽しみだわー）

一応、遠隔でも覗いていたりもしたが、やはり実地で見るのが一番だ。

G E H E N A。

世界でも有数の魔法と科学の研究機関。

そこに君臨する一人の魔女。

曰く、

「千代御代に関われば、例えどんなに完璧な完成品でも、欠陥だらけの試作に変わる」

それに感謝するか、嫌悪するかは相手次第。

前者も善いが、後者はもつと好い。

さて。

「あいつらの仏頂面が今から目に浮かぶわね♪」

楽しい楽しい論争の時間だ。

鼻歌まじりにラボの外へと踏み出した。

二つの光の爆発が巻き起こす熱風を中を二水は走った。

通信は、切れた。

結界ももうない。

一目散に目指すのは、

「——二水ちゃん！」

泣きそうな梨璃の声が通りざま粉塵の向こうから聞こ

えた。

駆け出す前に、一方的だったが二水自身の無事は伝えてある。

そして、

「ありがとうございます、梨璃ちゃん！」

受け取ったのは、梨璃のグングニル。

(間に合ってください！)

地中からの突き上げてきたラージ級の突撃とそれに向けたマギの爆発に乗って、空高く舞い上がった少女の身体。あれだけの一撃、自身のマギをすべて使い果たしていてもおかしくない。

そんな状態で空に投げ出されたら。

受け取ったグングニルを起動する。

増幅されたマギが、二水の身体を廻る。

落下の予測地点、

(あそこです！)

飛び込んだ。

ね？ 二水ちゃん。

あなたに「私が育てた最強のリリイ」。
預けたから。

あとは……。

よろしく！

「……あ。お姉さん」

(……ぎりぎりでしたよ。もう)

嘆息しながら、両手で抱き止めるのに失敗して、それでもなんとか受け止めきった。

半分つぶされたような感じになってしまったけれど。

そんな二水へ、また少女の腕が伸ばされる。

また頭を撫でられるのかと思ったら。

「……がんばりました」

チカラないブイサインが目の前に差し出された。
それに対し、二水もゆつくりと手を伸ばし返し。
ぺし。

汗で張り付いた前髪越しに、そのおでこに指打を撃った。
それに対する反応は返って来ることはなく。

満足げな笑みを浮かべたまま、少女は気を失っている。

「……まったく」

改めて嘆息する。

やはり体内のマギを使いきったんでしょう。

(厄介な子を預かってしまいましたよ？)

でもだけど、そんな二水の表情は、どうしたってリリイ
オタクの性というもので。

だから、つぶされたままの二水に、涙目で駆けつけた梨
璃が最初にかけた言葉は、

「……二水ちゃん、なんでそんなにうれしそうなの？」

……鼻血とか、出してませんよ？

大事な場面、でふからね！

P. S. その子まだ中学三年生くらいだから、二水ちゃん
のほうが「お姉さん」であってるわよ？

*
*
*

*
*
*